《授業と子ども》

ひらがなの授業（８）

―長い音はおかあさんの音がお手伝い―

千葉　建夫

みじかい音と長い音

長音も一音節を二文字で表す仲間である。長音の学習は、まず、対応する短音と比べてちがう音節であることに気づかせることが最初の授業になる。（図①）

図①

「鳥の仲間で黒いのは何の鳥は？」
「カラス」
「そのカラスは、何て鳴くの？」
「カ―カ―」

「カラスのカの音と、鳴き声のカ―の音とは、同じかな？」
「あのね。カを伸ばすと、カ―となるよ」
「カの音のしるしを［・］で書いたね。カ―はどうする？」
「カは［・］だから、カ―はのばして［―］にすればいい」

このような対話をとおして、子どもたちは短音の「カ」と長音の「カ―」のちがいに気がつき、記号化まで思いついた。それから「カ―」は「カ」と口を動かす回数は同じだが、発音している時間は二倍かかることをおさえた。（前回の促音の授業・図②を参照）そして「カ」という「みじかい音」に対して「カ―」は「ながい音」とよぶことにした。

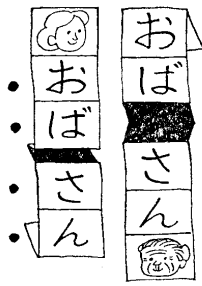
ながい音のたんごをさがす

次に［―　―］と黒板に書いて、長い音が二つならんでいる単語あつめをしてみた。

メ―メ―（ひつじ）、モ―モ―（牛）、ブ―ブ―（ぶた）、ク―ク―（ねいき）、グ―グ―（いびき）、シ―シ―（おしっこ）、キ―キ―（とびら）、ネ―ネ―（聞く）、ソ―ソ―（あいづち）、ス―ス―（すきま風）、サ―サ―（おあがり）、ハ―ハ―（つかれた）、マ―マ―（あまえる）、ヤ―ヤ―（かけごえ）、フ―フ―（あついおちゃ）・・・・・・・・・・・・・・。

最初は鳴き声だけだったが、生活の場面のかけ声や擬音語がおもしろいほど集まった。

つづいて、この長音の書き表し方の学習にはいった。折りたたみ式の教具を準備し（図②）、「オバサン」と「オバ―サン」の発音のちがいを比べた。



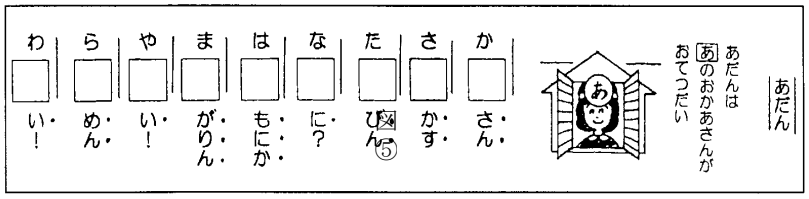
図②

「オバサン」は［・・・・］で四つの短い音ですね。「オバ―サン」は、［・―・・］で、これも四つの音です

が、二番目にバ―という長い音があります。この「ば」の字の下に空いているところは、このままでいいですか？」

『バ―』はね。のばすと、『―ア』と、あとに『ア』の音がでてくるでしょ。だから、『あ』の字をいれればいいよ」

「よく気がついたね。じつは、『バ』という音を長くのばすと、『ば―ア』と『あ』のおかあさんがでてきますね。だから、『ば』のあとに『あ』のおかあさんの字を書くことにするんだよ」



図③

長い音は　おかあさんがおてつだい

それから、ア段の長音表記のための表（図③）を出して、表の単語を発音してみた。

「ア段の子どもたちが、長い音になって単語をつくるときには、あのお母さんが手伝ってくれるんですよ」

そういって、表の長音の空欄にあの文字を書き入れた。すると、テッちゃんが

「あのね。子どもが長い音になりたいときに、おかあさんにかたぐるましてもらえるんだね」

と発言した。

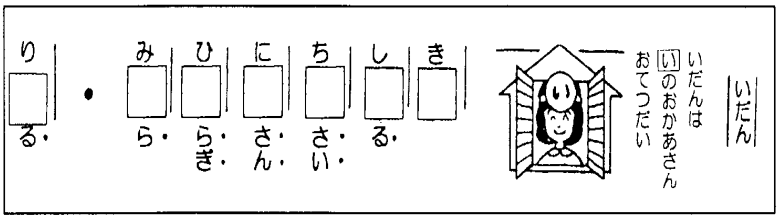
その例えが子どもたちによくわかったらしい。（図④）

図④

次にイ段の長音表記のための表（図⑤）を提示した。これを見た子どもたちはすぐに、

「わかった！『い』の子どもには、『い』のおかあさんがお手伝いにくるんでしょ」

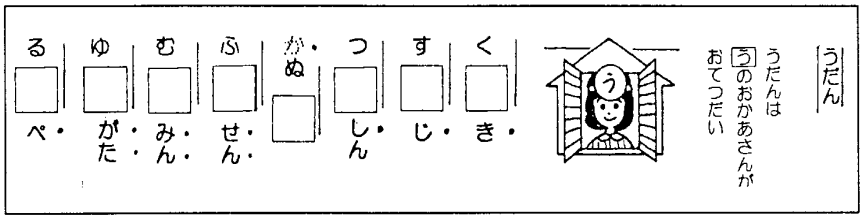
と反応してきた。イ段の単語の空欄に「い」を書きこむと、ア段とイ段の学習から、子どもたちは長い音を書き表すときは、それぞれの音におかあさんの音の文字をそえて二つのひらがな文字でかけばいいということがわかってきたようだ。



図⑤

表にある外来語の長音は、カタカナを学んでから「―」のしるしで書き表すこととし、この段階では全部ひらがなで表記することにした。

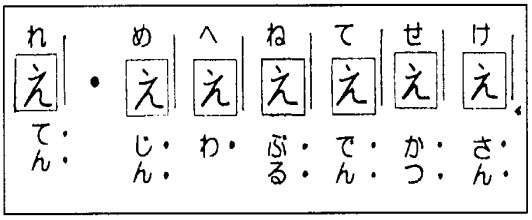
次にウ段の長音表記のための表（図⑥）を提示する。すると、子どもたち



図⑥

から、「うだんの子どもの長い音は「う」のおかあさんがおてつだい！」という大合唱が起きてこれも簡単に解決した。

このように、ア段、イ段、ウ段の長音表記はわかりやすい。発音もあらたに母音を発音するのではなく、前の母音をもう一つ重ねてそのままひきのばした音節（なが母音）になっている。温泉にはいって思わず発する「ああ、いい、気持ち」という声の「ああ」は、[aa]～[a:]の、どの音か区別がつかないほど似ている。「いい」（[ii]～[i:]）も、「うう」（[uu]～[u:]）も、それぞれお互いに非常の近い発音なので、実際上の区別はほとんど問題にならない。



図⑦

えだんは　おかあさんがいない

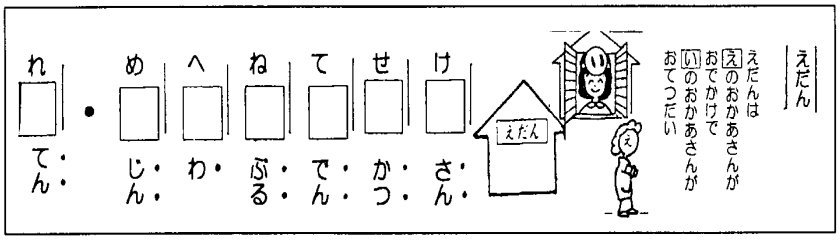
ところが、エ段の[ei]～[e:]とお段の[ou]～[o:]は発音は、非常に微妙なのだ。

エ段の長い音の書き表し方にはいって、上の表（図⑦）を提示すると、子どもたちは、

「け――――　エ、あっ、えだんだ」

とすぐ反応して、みんな「え」をいれる子どもたちは、ア段、イ段、ウ段でつかんだ法則をそのまま素直に適用する。

ところが、「改定現代仮名遣い」（昭６１・国語審議会答申）によると、エ段の長音としては素直に認めているのは、「ねえさん」と応答語の「ええ」だけなのだ。「栄華」と「映画」のように[ei]と[e:]とのちがいがあっても、「エ列の長音として発音されるか、エイ、ケイのように発音されるかにかかわらず、エ列の仮名に『い』を添えて書くものである」と定めている。エ段の長音は、「ねえさん」「ええ」以外はすべて「い」という表記に統一しているために、「生活」を「セイカツ」と発音するのに「せいかつ」と書くという不自然なことが起きる。子どもたちは納得できないまま覚えなければならないのが現状なのだ。エ段の長音の表記の指導は、発音と関係なしに、「い」の文字を長音記号としてあつかわざるをえないのである。



図⑧

エ段の長音の空欄に「え」をいれた子どもたちには、次のようなお話しをした。

「これまで、ア段、イ段、ウ段の子どもたちが長い音になるときは、おかあさんがお手伝いにきてくれました。でも、エ段のおかあさんは、昼はお仕事にでかけているんです」

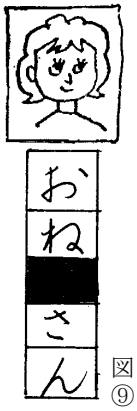
すると、

「えだんのおかあさんは、共かせぎ

なんだ」
という声がした。
「そうなんです。だから、エ段の子どもたちが長い音になりたいときに、すぐお手伝いにこられません」
「だったら、だれか、お手伝いにくるの？」
「エ段のおかあさんの留守の間、『こまったときには、なかよしのイのおばさんにてつだってください』とお願いしているんです」
「そうなの。えのおかあさんのかわりに いのおかあさんがきてくれるの。よかったな」
こうして、いちおう、子どもたちにはエ段の長音は空欄に「い」を添えて書き表すことを納得してもらった。（図⑧）

えだんのおねえさんは　あまえんぼう

エ段の単語の長音表記の練習をしたあとで、この一般的な原則にあてはまらない「おねえさん」の絵（図⑨）を提出した。それを見て、
「『オネーサン』だから、エ段だ。おねいさんでいいんだよね」
と子どもたちはいう。



図⑨

「ところがね、このたんごだけ、そうじゃないんだよ」
「えーちがうの？」
「エ段のこどもたちのなかにね。ひとりあまえんぼうの単語がいたんです。それが、オネーサンです。オネーサンは、えのおかあさんでなければいやいやといって、泣きやみません。そこで、えのおかあさんがきてくれて、おねえさんとなったのです」
「おねえさんなのに、おかしいね」
「おかあさんは、おしごと、こまっちゃうじゃない」
と子どもたちは文句をいいながら、エ段の例外となる「ねえさん」の書き表し方を覚えていった。

エ段の学習のあとだった。クラスのキヨちゃんが絵本を抱えて勢いよく教室に入ってくるなり、私の前にきて、
「ねえ、ねえ、見て。あま

あまえんぼうの　おねえさんの　おはなし

あだん、いだん、うだんのこどもたちが、ながいおとを　あらわすときは、のおかあさんが　いつも　てつだってくれています。
「ところが、えだんの　のおかあさんは　「おでかけしているために　えだんのこどもたちには　てつだってやれません。そこで　のおかあさんが　かわりに　てつだってくれるのです。ところが、えだんのこどものねの　ながいおとのあるたんごのなかに　「おネーさん」というたんごがあります。「おネーさん」は、とっても　あまえんぼうです。それで、ながいおとになるときに、「ねえ、ねえ、おかあさんでなくちゃいや」といって、ないて　おかあさんを　こまらせるのです。だから、「おネーさん」のときは、　のおかあさんが　てつだって、「おねえさん」と　かくことにしました。それから、「めえめえ」となく　こやぎのなきごえも　のおかあさんが　おてつだいをしています。
図⑩

子どもたちの　かんがえた　おぼえかた

めえめえ　こやぎの　すぐそばで
ねえねえ　おねえさんも　ないている
（ゆうこ）

おねえさんはねえ。
めえめえ　こやぎのなきごえが
うめえねえ。
（まこと）

えんぼうのたんごをもうひとつみつけたよ」といって、見せてくれたのは、「めえめえこやぎ」の歌だった。なるほど、鳴き声のメーメーが「めえめえ」になっている。キヨちゃんが発見した「めえめえ」もエ段の例外表記の仲間にいれて、子どもたちとあまえんぼう単語と名づけた。そして、

「あまえんぼうのおはなし」（図⑩）をつくって、おぼえることにした。

おだんはあまえんぼうがいっぱい

オ段の長音もエ段の長音とまったく同じように授業は展開した。

「オ段のおかあさんもおでかけです」

といったら、子どもたちから、

「わかった！こんどはうだんのおかあさんがおてつだいにきてくれるのでしょう」

と先回りして言われてしまった。

「オ段の長い音はオ段の子どもにうのおかあさんがお手伝いをします」（図⑪）と学習をまとめていたら、こんどは、

「おだんには、あまえんぼうのたんごはいないの？」

と聞いてきた。

「そうなんです。じつはね。ウ段には、おのおかあさんでないとイヤという　あまえんぼうのたんごがたくさんいてね。こまっちゃったの」

というと、

「そのたんごは、何なの？おしえて、おしえて」

と聞いてくる。

「改定現代仮名遣い」には、「次のような語は、オ列の仮名に「お」を添えて書く。」とあって、お段の例外表記の例があげられている。（図⑫）

図⑪

図⑫

オ段の例外表記

①おおかみ
②おおせ（仰せ）
③おおやけ（公）
④こおり（氷）
⑤こおろぎ
⑥ほお
⑦ほおずき
⑧ほのお（炎）
⑨とお（十）
⑩いきどおる（憤る）
⑪おおう（覆う）
⑫こおる（凍る）
⑬しおおせる
⑭とおる（通る）
⑮とどこおる（滞る）
⑯もよおす（催す）
⑰いとおしい
⑱おおい（多い）
⑲おおきい（大きい）
⑳とおい（遠い）
㉑おおむね
㉒おおよそ

おおかみとこおろぎのはなし

一年生でこれらすべてを暗記する必要はないので、私はここから低学年でよく使われる九つの単

図⑬

おおかみとこおろぎのおはなし

オ段の例外

①遠くの　とおくの
②大きな　おおきな
③氷のうえを　こおりのうえを
④多くの　おおくの
⑤狼　おおかみ
⑥十ずつ　とおずつ
⑦通った　とおった

ほおずきの　したで
こおろぎが　ころころ　ないたよ　、

語を選んで、紙芝居風のお話（図⑬）をつくった。「おおかみの話」は「かな文字の教え方」（須田清著）に出ている話、これに「こおろぎのお話」をつけくわえた。すると、このお話を聞いた子どもたちが、自分たちも作りたいといい出した。作らせてみたら、みごとなお話しができあがった。（図⑭）お段の長音表記の例外もこのお話にリズムをつけて、歌のようにして覚えた。

子どもたちの　かんがえた　おぼえかた

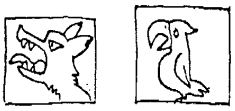
おおきい　おおかみが
とおい　やまで　ほえたよ。
ほおずきの　はたけを
とおったら、
こおろぎが
おどろいて、
こおりを
とおも　たべちゃった。
（けんた）

おおきい　とおの　おおかみと
ちいさい　とおの　こおろぎが
ほおずきを　さがしに　いったの。
こおりに　おおわれた
のはらを　とおって
とおくの　やまに　たびをしたの。
（けいこ）

図⑭

ちがいをみわける手がかりに

「おおかみとこおろぎのおはなし」は、オ段の長音の表記が「―う」になるか、「―お」となるかを見分けるキーワードとなる。いろいろな単語で見分ける練習をした。（図⑮）



おおむ
おうむ

おおかみ
おうかみ

どっちかな
↓

おおかみとこおろぎのおはなしにでてこなかったから「う」でいい。

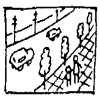
どっちかな
↓

おおかみとこおろぎのおはなしにでてきた。だから、「お」のほうだ。

図⑮

おおさま
おうさま

ほおずき
ほうずき



とおり
とうり

どっちかな
↓

これはおはなしにでてこなかった。だから、「う」でいい。

どっちかな
↓

こおろぎのおはなしにでてきた。だから「お」になる。

どっちかな
↓

おおかみのはなしに「とおる」があった。おなじかな。おはなしにはでてこなかったよ。

最後の「とおり」はむずかしかった。「とおり（通り）」は、「とおる（通る）」という動詞が名詞化しているわけで今の段階では無理なのは当然だった。他の動詞や形容詞などの語尾変化のある単語なども、学年が進んで深く日本語のしくみを学ぶにつれてわかるようになっていくだろう。

子どもたちが、エ段とオ段の長音表記とその例外を見分けて、書き表せるようになることはそう簡単なことではない。けれど、そのしくみを学ぶことで、「氷」が「こおり」か「こうり」なのか、「王様」が「おうさま」か「おおさま」なのかを弁別する手がかりを手にすることができる。わからなくなったら、何度もここにもどって考えるようにすればいい。そうしながら子どもたちはより確かに長音の書き表し方を身につけていけるはずだと思う。